

5

王宮で千人の召使いにかしずかれながら
最後の皇帝は夢見ている、
砂さえ補給してやれば
塚ひんの中で何か月でも元気に動き回っている
砂漠の糞ころがしの大いなる自由を

信

8

ゴールじゃないんだってさ、教えてもらったんだ、
道程なんだって……なるほどもう一つの世界の知恵か！
僕の国では、二人が駆け寄る時は
旗をふりふり、シャツをひらひら、
どうせ互いに運命共同体、
問題はどっちが上でどっちが下かだ

ウリ

6

毎晩短波ラジオの前で息を殺して
聞いているシュプレヒコールは静まりかえり
響いてくるのはお手盛りの拍手だけ
あのお化け蛸は張り子の蛸だったというのね
生き残った私たちはほっとして歴史を書き綴る
死んでしまった人たちはどんな歴史を書けばいいの

ガブリエレ

7

分厚い書物の中に生きるよりも
ひとりの女の思い出のうちに生きたい
ひるがえる旗を見上げるとき
私は旗よりも風を喜んでる

俊太郎

10

掛蒲団のはじから長い爪をのぞかせて
毛むくじやらかな黒い腕の持ち主は言った——
「赤頭巾や 優しいお祖母ちゃんを忘れたのかい？」
狼はさもいとしげに美味しい少女を食べてしまった
空には虹が 天国への橋をかけて
つかのまに消える微笑みをふりまいていた

ガブリエレ

信

11 生まれて初めて手に入れた車を洗う少年の姿
きらめく水しぶき——次の世紀へ捧げられるありふれたアイコン

俊太郎

12 おとといニューヨークから飛んできた
ここに——私の切り離された根っこの近くに
風は空路を吹き払い カリフラワー雲をもぎ取った
そして私の考えを吹き散らした
(どれほど「無階級社会」が

世俗化された神の概念を表現しているのか)

私は痛みを待っていた
だがその代わりに飛行機を降りた時
笑い涙が足元に星のように飛び散った

ガブリエレ

13 株価は天井知らずの上がりよう
いっどつと売りに出ようか
そればかりを考えているこの幸せ
俺の悩みはただ一つ 株価と同じに
血圧も近ごろ上がりっ放しなんだ

信

14 スポーツなんてだれも言うなよ 今は
動かなくちやならないんだったら、
地球がいいさ。とにかく俺は座って
書いているからな、夜中に、電話が沈黙すると
振動を感じるよ、かすかな揺れを——
俺の震度の目盛りは無量大

ウリ

15 カヌーにさざ波が寄せてくる
河のように流れる文字の上で仮泊する
私たち ささやかな探検隊

俊太郎

16 最近鮭の生態について研究したの
彼らは——漁師や熊やぼつきり折れた石油タンカーが
邪魔しない限り——
いつも大海原を回遊して生まれた河に戻るんだって
いつかは、と私の友達が言うの、
あなたもはるか彼方から杖にすがってザクセンまで
間に合うように帰るのよ 骨を埋めに

ガブリエレ

17

時代遅れだな、流れに逆らって泳ぐのは
歴史のはきだめは
反抗精神に別れを告げた新しい世代の太陽灯の
天まで臭におっている

捕鯨はオーケーだ 真の研究のためだけなら
学者だって何かを食べなくちゃならないからな

ウリ

18

燕の巢 熊の掌てのひら 猿の脳味噌 蜂蜜漬けの子鼠
舌は食欲だ 歯も 唇も 目も 鼻も
意味よりも味を求める CARPE DIEM*の日々！

俊太郎

19

一切の希望を捨てよ、その余は手すさびのみ、
もし汝にして怠惰なるを斥け、
汝のもてるものの悉くを賭するを避け、のびやかに
偶々の思念の閃きにも心を開くことなかりせば……
蝶々蒐集家が今世紀最大の詩人の一人になったのは
偶然ではないのだ。

ウリ

20

して、建物の最重要の部分とは何ぞ
柱も壁も不可欠なり
されど最重要の部分とは
柱と壁に囲まれたる空間なり
空っぽゆえに そは容るるを得たり
人をも蚤のみをも 全世界の詩人をも

信

21

よく知られた話だが
白い紙にも例外なく
裏表がある
創作欲をかき立ててもすれば
気分の乗らない日の嫌な相手にもなる
そんな日は映画館でのうたた寝に限る——灯が消えて——
色鮮やかにスクリーンに生が灯もる

ウリ

22

夜のほうがずっとよく見えるのだ
はなやかな昼の幻の重ね着にかくされた
恥ずかしい自分の裸が

俊太郎

23 夢の網

かすかに揺れている チツペワ族の赤ん坊の息で
悪い夢をとらえ

よい夢だけをすり抜けさせる細かい細かい網あみの目

だが文明はいつの間にか押し寄せた

巨大な毒蛾をちっちゃなぎょうちゆう蟻虫に変える魔法使いとなつて

さもなくば我らどうして虚無へのトリップに駆り立てられる？

と長老は問いかける

ガブリエレ

24

高度四千メートル近い富士山に

降り積もる雪のあるものは

うねうねと地下水脈に濾過されながら

百年の後 四十キロ南の町で泉となる

透明な水の光に変わって輝いている

おびただしい鉱物の汗

信

25

手紙の山の中にはラブレターばかりある訳じゃない

「この冗談を十二回写して

十二人宛に投函しろ

そうすれば君の敵は背中に瘤が生え、

友だちには一億円が舞い込むぞ

何もかもうまくいく——この幸福の手紙の輪わを切るな！」

ウリ

26

すべては言葉の罪と言うなら

言葉がタブーのバツカスの祭を祝おうではないか

「だが」とアンドレ・グリーンは言う

「祭をはずれて必ず誰かが

来ていない誰かのことを訊ねるだろう」

そうなればすべてご破算 やり直し

ガブリエレ

27

「もういいかい」

お前はどこに隠れているの

「まあだよ」

聞こえるのは嘲けるような声ばかり

お前はだれ？

死 それとも無垢 それとも愛の名で呼ばれる何か

俊太郎

私のおばあさんは二十七歳でやもめになった
それ以来寝る時は

着古した下着だけ「だれも私なんか見やしないわよ」
六十年経って――

肌はもうだぶだぶサイズ――

ある夜突然レースのペチコートで

――お化粧までして――床についた

「だれか来るの」びっくりして訊ねると
にっこり笑って「そろそろ花婿がね」

ガブリエレ

地平へとつづくなだらかな畠の起伏から風が生まれ
朝露に湿った土の匂いを運んでくる

崩れ落ちた城壁のかけからのぞく仔鬼の耳

どこからか口琴こうきんのピアニシモ

俊太郎

「馬車がカボチャに戻ってしまう前に

楽しいダンスを切りあげなくちゃならないなんて

何てつまらない人生でしょう」

女たちの中に住むシンデレラはぼやく。

カボチャの横で途方に暮れている女もいる。

ああ、これが大問題だ。

ガラスの靴で足を傷つけながらも

人生という階段をスキップしていくか、

それとも座ってカボチャを美味しく食うか。

信

見渡すかぎり波立つ海、ブロンドの麦畠は

枕にかかる波うつ髪そっくり――

まったくだ、近づいてみると

二人が通り抜けられるほどの幅に薙ぎ倒された小麦

畦あぜを離れて跡をたどって行くと――

ぼつかりと空き地

そこはエイリアンたちの牧歌的な愛の巣

ウリ

32

あの男の名前はだれにも言うまい

彼が男だったかどうかさえ思い出せない

名前さえ ほんとは知らない

彼は私の知らない言葉で囁きつづけた

私はうっとりその睦言を聞いていた

私の星と彼の星は

二百万年にただ一度接近する

信

だが限りなくよみがえる細部はたぶん神に属して
本当の物語をだれも読みとることが出来ない

俊太郎

33

土砂降り たちまちアスファルトの水ぶくれ

こちこちに凝った背中にくらいついた真空吸引器みたい

私はあわてて橋の下に逃れる

ホームレスの群れ 一人が記念碑を指さす

「ふくろ うの羽根 男

リンカーン時代 この地で吊さる」

ガブリエレ

ウリ

34

窓外の噴水が風に飛ばされてる今日のこのひとときが

私にどんな深い喜びをもたらしていることか

あらずじならだれでも知ってる

ガブリエレ

36

昨日弟が昔の写真を持ってきた

子供だった私の顔はひきつっている

あの時の私のねたみがよみがえる

生きている実感が無い時も顔を歪めず

人生を歩んでいるかのように見える人々の充足へのねたみ――

いつか私の顔は滑らかにになった

私は見破ったのかしら

微笑んでいる人たちはみんな嘘をついていることを

37

仮面が何で必要だろうか

顔を覆い視野をさえぎることによって

一層人を彼自身に目覚めさせるのでなかったなら。

音楽が何で必要だろうか

音をみごとに組み立てることによって

到達しがたい深さをもった沈黙に奉仕するのでなかったなら。

信

38

私たちの時をあざけるかのようにゆっくりと

避けられぬ運命を負って能役者は登場した

もうだれもあんなふうには歩けない

理性の及ばぬ場所へさまよい出た老人たちの他は

俊太郎

39

垣根の外では騒々しい車の流れ

警笛音、ブレーキの音、加速音 まったく只でもあるまいに

週末になるとおおわらわ

騎士がおのが身を剣に投げかけるように――

とにかく家を後にして

たどり着くのは正しい人生だ！ 外に比べてこっちは

何だか年とった感じ、いやそれどころか

悟りきったも同然さ……林檎ワインでカダーヴル・エッセキ妙なる死体

ウリ

40

地図出版社の社長が嘆く――

ああ 秋だ 紅葉する木を見るたびに

東西統合がいまましい

一夜にしておれの地図の色分けは

役立たずになってしまった

いつそアラスカの処女雪に埋もれ

真白な世界地図の夢でも見たいよ

信

41

熊が鮭の腹から卵を食いちぎるみたいに

サダムは地球の一番美味しい部分にかぶりついた

躰のよい私たちはびっくりぎょうてんして

五千年の昔から歴史の歩みを見守るだけ

歴史は道徳なんて気にもせず、迫害された者たちを

熊が食い散らした魚さながら

川岸の藪へぽいと投げ捨てる

ガブリエレ

42

大地に触れるしかなかった手は

いつかつつましい食物連鎖の鎖から解き放たれ

今は青空をまさぐっている

その空の彼方に口を開ける黒い穴について

嬉々としてコンピュータは語りつづける

43

道ばたの色とりどりの春の草花

その内側で陽に暖まり 大欠伸して

「すべてよし」と滅んでゆく冬

消滅が完全なので

冬のすべては春の中で

新しくなる

俊太郎

44

そして次から次へと手渡されるボタン

——それはするどく削られた鉛筆から始まって

洗熊の筆で終わる

ああ、何て貴重なものなんだ

動物のうなじから採られた最も繊細な毛

そつと撫でてやるとゴロゴロと

気持ちよさそうに喉を鳴らすところ

ウリ

信

企画展 「谷川俊太郎展・本当の事を云おうか・」 大岡信の部屋資料

会期：平成28年9月22日（木）～12月25日（日）

大岡信ことば館